

宗岡中だより



7月号 平成30年7月2日(月)
志木市上宗岡1-8-1 TEL 048-471-2241

「紫陽花や 雫に映える ガクの青」

校長 佐藤哲浩

関東地方には梅雨前線が停滞し、例年の梅雨らしい天気が続いています。私の隣の家の紫陽花は、この季節を待っていたかのように、雨の中、青紫色や赤紫色を解き放っています。実は私たちが紫陽花の色が美しいと感じている部分は、花ではなく顎（ガク）であることを知っているのでしょうか。紫陽花やランなどの花を「装飾花」と呼び、色付いてきれいに見える部分は顎であり、花はその中心部にある丸い粒の部分なのです。



話は変わって、6月17日から22日まで、学校総合体育大会が開催されました。運動部の多くの3年生にとっては、引退のかかる大きな大会です。私は15日の壮行会で、最後まで諦めずに真剣にプレーすることは勿論、「感謝の気持ちを忘れないでほしい」と生徒に話しました。では何に感謝するのか？一つ目は人への感謝、これまで皆さんはどれだけ人に支えられてきたでしょうか。顧問の先生や外部指導者、試合のたびに弁当を作ってくれた人、汗まみれのユニホームを洗ってくれた人、試合のたびに応援に駆けつけてくれた人。二つ目は環境への感謝、今まで試合や練習ができた環境（校庭、体育館、コート）、部活動を行うために買ってもらった道具（ラケット、シューズ）。三つ目は時への感謝、今まで仲間と練習して絆を深めることができた時間、過去・現在、それから競技を続けることのできる未来に感謝することです。なぜなら部活動は競技を通して技術力・精神力を高め、人間形成を行うことが目的だからです。

プロ野球で読売巨人軍を11回の優勝（うち9連覇）に導いた名将、川上哲治監督は、当時のスカウト担当に、「身体能力が同じなら、親孝行である選手をスカウトしてくれ」と常々言っていたそうです。川上監督の著書を読むと、「当時は日本が高度成長期に向かおうとしているまだ貧しい時代であり、若い時に苦勞している選手はハングリー精神があり、感謝の気持ちを失わず、プロの世界では後々伸びてくる」と語られています。当時と比べ経済的に豊かになった現代の社会でも、私は同じではないかと考えています。

大会中は本校の部活動がある競技を全て応援して回りました。本校の生徒は、どの競技も一生懸命取り組んでいました。接戦をものにして歓喜に涙したソフトテニス部の試合、サヨナラ負けで悔し涙を流した野球部の試合、県大会の手前で負けたが仲間と称えあったバスケット部の試合、今まで必死にやってきたからこそ涙を流し、絆を深めることができたのです。今大会で引退する生徒、県大会に出場する生徒、いずれ引退する時はやってきます。これまで打ち込んできたエネルギーは、間違いなく人間を成長させています。